

「^{どう}道^ち智^{みち}道」補完資料

- 【 補完資料－1 】 神仏習合一大聖地・聖域のこと
- 【 補完資料－2 】 陰陽五行説と易経のこと
- 【 補完資料－3 】 月山～旧「道智道」の古今風景（替え歌）のこと
- 【 補完資料－4 】 山形新聞に掲載された旧「道智道」関係者踏破の記事

【 補完資料－ 1 】 神仏習合一大聖地・聖域のこと

後記【補完資料－ 4】掲載の新聞記事の内容は事前に知っていましたが、この度の旧「道智道」スルーハイクを終えて帰宅後、改めて同記事の内容を読み返すにつれ、次の点がさらに気になってきました。

？ 1：大正期に発行されたという『大日本帝国陸地測量部』地図のこと

？ 2：同記事には記載のない土壇のこと

？ 3：現在も現存するとされる移設社殿の現況のこと

？ 4：「古峯（こぶはら）神社」石碑のこと

そこで、本スルーハイク終了3日後の2017（平成29）年8月31日（木）、白鷹町の伊藤隆さんを訪ね、さらなる情報を入手しました。そのうえで同日、さらに翌9月1日（金）にかけて、以下に記述する現地を訪れました。

現在着目している地点は、旧日影・旧中平の集落とその間の区域です。図1－1のとおりです。

この中で、拡大図は次頁図1－3のとおりで、同図①と②の地点に焦点を当て、図1－2の対比構図を念頭に置きながら、聖域と考えられる理由について以下に記述します。

なお、この考察の中では、陰陽五行説に関わる「北（方）を水気、南（方）を火気とする」という北南軸（子午線軸）が気になります。そこで、陰陽五行説および易経の知識が多少あると理解（想像）が深まると考え、【補完資料－ 2】に別記しました。

1. 「A；①石碑群7基、元社殿（水稻荷神社）、現在標高580m」地点のことについて

この地を拡大したのが次ページ図1－4であり、図1－3中③点の道路切通し箇所は図1－5のとおりです。

なお、図1－4中の二重丸、フラッグ、四角中点のマークはGPS機器で特定した位置です。

この区域は、図1－3①点の状況（元社殿、大神宮塔等7基の石碑）や③・④点の庚申塔・供養塔・石仏写し霊場・墓地等、さらに少し離れた図1－3②点の「古峯神社」石碑（社碑）から見て、周辺集落の住民によって神仏習合一の一大聖地として祀られてきた場所ではないかと考えています。

すなわち、地区の人々が様々な祈りを捧げた神仏の集合地であり、斎場（さいじょう）（ゆには：祭祀・儀式の会場）として守られてきたのではないかと考えられます。

その見立ての理由について順に記述します。

(1) ①標高 580m地点とその周辺

a. そこに社殿があったという証拠

大正期発行の『大日本帝国陸地測量部』の地図（図 1-6）を前出伊藤さんのご厚意でコピーを入手出来ました。

—これで“？1”が解決しました。

この地形図は、大正二年二月二十八日発行のものであるが、確かに神社の印が記載されています。（旧）日影・中平の集落名、ならびに、家屋の印も明記されています。なお、当時のピークは標高 579m のようでした。しかし、別途、昭和六年のものには、神社の印は省かれ記載されていないことを確認済です。

b. 現地の状況

(a) 石碑 7 基

次ページ図 1-7 写真のとおり、石碑 7 基（うち 1 基は倒伏）が安置されています。

石碑群のある土地は、おおよそ 25m 四方の広場で、二段に整地されています。地図には神社の印がありますが、【補完資料-4】掲載の記事によれば、石碑の前には社殿が存在したとのことでした。

後記図 1-12 写真のような神社の規模であれば、参集する人々を含めて十分な広さの平坦地であると考えられます。

また、この 7 基の石碑は横一列に、ほぼ真南向きに安置されています。したがって拝む人は真北を向くこととなります。

(b) 土壇のこと

私が旧「道智道」スルーハイク当日に確認したのは、標高 580m ピークより南西約 70m の位置にある図 1-8 の土壇 1 箇所（約 10m 四方）でした（図 1-4 の□1）。

しかし伊藤さんから得た情報のとおり、同様の土壇がさらに 2 箇所存在することが分かり、後日現地確認しました。

—これで“？2”が解決しました。—

この土壇は自然地形の平地の下部四方を掘削して排水のための溝状に整形したもので、いわば周壕（堀）が巡らされている状態です。

伊藤さんの話では使用目的は明確ではありませんが、何らかの儀式に用いられたのではないかとの見方もあるとのことでした。

その「儀式」というヒントから、私は次の可能性を想像しました。

- ✓ 1 ; 神社の祭典・祭礼において、神楽や獅子舞などの舞台としたのではないか。
- ✓ 2 ; あるいは御旅所（神社の祭礼において神輿に乗せた神様が巡幸の途中で休憩または宿泊する場所）だったのではないか。
- ✓ 3 ; はたまた相撲土俵（相撲は、元々は日本固有の神道に基づいた神事であり、祭りの奉納の一つとして行われたもの）などではなかったのか。
- ✓ 4 ; 護摩壇（護摩修法儀式の祭壇）だったのかもしれない。（これが濃厚か？）

ただし、なぜ 3 箇所必要だったのかという疑問が残ります。

例えば、

- ・式年遷宮のように祭壇を定期的に移す形式
- ・地区ごとに祭祀の担当場所を分担した

などの理由があったのかもしれませんが。

私の凡才で勝手な想像も楽しくなります。

(c) ③道路東側枯松足元にある多数の石仏群のこと

図 1-9 のとおりで、今回は草木が繁茂して確認しにくかったため 2015 年秋撮影の写真を使用しました。

多数の石仏が横たわっている状況から、当初は観音霊場の写し霊場ではないかと想像していました。

今回現地ですら図 1-10・11 の石碑「當國三十三所供養塔」を確認したことで、その推測はほぼ確実にになりました。

「當國」とはおそらく置賜であり、置賜三十三観音の写し霊場であったと考えられます。

当時、この聖地一帯を巡礼できるように石仏が配置されていたのでしょうか。

その後、廃村に伴う整理の過程で、この場所に集められた可能性があります。

(d) ③④道路西側南北の石碑のこと

大神宮（道に落ちて裏返しになっていた）、庚申塔、供養塔、南無阿弥陀仏、その他裏返しになった石碑 2 基がありました。

(e) 「大神宮」碑のこと

標高 580m 地点に 3 基（7 基中）と上記（d）1 基の計 4 基があり、全体からすれば一番多いが、当時は如何に伊勢神宮に対する信仰心が篤かったかということが窺われます。

.....

同伊藤さんによると、図 1-5 のように切通しになっているが、道路開通工事の際に機械が入り開削されたことから、石塔類はさまざまに移設されているだろうとのことでした。現地の状況からも、そのように頷けるところがあります。

思うに、日本古来の民族信仰の基層には、簡潔に言えば、人が死ぬとその霊は里山でしばらくの間供養され、人々の供養を受けながらやがて昇華・純化し、さらに奥の中山へ移り、最後には祖霊神として崇められて深山に籠り、時には山の神となり、田の神となって、生きている人々の近くまで飛来するといわれる考え方（山中他界思想）があります。

ここは、旧日影・旧中平の両集落にとって、まさにその中山・深山に当たる聖地であったのでしょうか。これらの石塔類は、ご先祖を神仏（かみほとけ）として、そのご加護を期待して祀ったものと思われる。

(2) 元社殿（水稻荷神社）は現存

私が名称を付したこの聖地一帯において、齋場（さいじょう）（ゆには）の中核を成していたと思われる元社殿について述べます。【補完資料-4（P28）】の新聞記事によれば、標高 580m 地点で石碑の前にあつ

たとされる社殿が、『道の駅白鷹ヤナ公園』駐車場北端に現存しているというのです。

そこで、2017（平成 29）年 8 月 31 日（木）、現地に出向いて確認しました。その結果は図 1-12 写真のとおりで、「正一位 水稻荷神社」という名称になっています。大きい社殿は屋根幅約 3.6m、奥行約 4.6m の大きさで、内部には「御幣」が祀られています。なお、右側奥の小さな社殿の内部には不動明王が祀られており、大きい社殿と一体のものようです。

——これで“？3”が解決しました。

現社殿の前には、図 1-13 のとおり説明板が掲示されています。元の位置との関連としては、「日影」の文字が見られ、旧集落名の一つであることが分かります。

元々の神社名は不明ですが、説明板冒頭には御祭神として「火と水の神」と記されています。これは動かしがたい事実と思われるため、元の神社名を詮索することにはあまり意味がないのかもしれませんが。

また、「正一位」という神階最高位の称号が冠されていることから、当時から「水稻荷神社」であった可能性が高いと考えられます。なお、「正一位」は稲荷神社の異称のように用いられることもあるようです。

さらに、多くの天神地祇が合祀されており、いかにも大和の国らしい、多神教の日本を感じさせる姿でもあります。

それにしても、この社殿は何度も移転してきたようです。まるで流浪の旅をしてきたかのようにも見えます。いったい、なぜなのでしょう。

なお、稲荷神とは、稲を象徴する穀霊神であり、食物の神、農耕神でもあります。

ここで「火と水の神」が登場しました。まず、中央部よりやや左にある次のフレーズ——昔から万物を生成する根源は五行（木・火・土・金・水）であるとされており、「この内の四つの動きを包容する『水』は、汚物を三寸流し・・・」——が気になりました。

つまり、『水』は『木・火・土・金』の四つを包容するというのです。それらに付着した汚れを単に落とすだけなのでしょう。いや、もっと奥深い意味があるはず。どのようなイメージで捉えればよいのか、直感ではすぐには浮かびませんが、少し考察してみたので後記します。

ところで、「鮎」と結び付けたところには、やや無理に後付けした感がありますが、まあ、当該神社を引き受けた側の役得というところでしょう。

2. 「B ; ②『古峯（こぶはら）神社』石碑、標高 570m」のことについて

白鷹町史談会長の丸川二男さんから頂戴していた資料にあったこと、ならびに前出の伊藤さんから伺っていた話を踏まえ、確認したく現地に足を運びました。

場所は図 1-3 のとおりです。2017（平成 29）年 11 月 3 日（金）の午前中に現地に行き、石碑を確認しました。その場所まで歩いた軌跡（GPS 記録）は、同図中の紫色の実線のとおりです。

当初、580m 地点からの入り口が分からず、少し思案しました。石碑 7 基が建立されている標高約 580m 地点から、ほぼ東方に緩やかな尾根を約 160m 歩いた所がありました。

道筋は明確ではありませんでしたが、かすかな踏み跡があり、葉が落ちていたため見通しが良く、迷うことなく到達しました。標高約 570m の小高い平坦な場所でした。

現地には図 1-14 のとおり、立派な石碑が安置・建立されていました。

裏側には、建立年「明治廿八年四月一日」（縦書き、明治 28 年＝西暦 1895 年）と、発起人 3 人の名前が刻字されていました。

——これで“？4”が解決しました。

なお、建立年の刻字の拡大は図 1-15 のとおりです。

石碑・石塔は「たかが石（ころ）」ではあるが、一つひとつは異なった神仏を宿した神社や寺院の縮図、一つの地域の文化・歴史を凝縮したひな形・模型と理解しております。この古峯碑は建築物ではないが、まさに社殿そのものなのである、と思っています。

「古峯神社」は、一般的に、あるいは古峰神社とも称され、「火伏の神・火防の神」であります、ここでも、文字は真南を向き、拜んだ人は真北向きになるよう建立されています。火を鎮める一方で、火（熱）を求める、つまり、火を制御する火の神様なのですが、その理由などについて後記します。

3. それぞれの設置意義について

（1）陰陽五行説の火気と水気について

以下の記述に当っては、陰陽五行説に関連します、細部は【補完資料-2】に記載するが、ここでは前記神社に絡むことに絞って触れます。

a. 水気に対する信仰についてです。

次のような水の力（神威力・神通力）に対する期待があります。

（a）なんと言っても、動植物の生命力維持の基礎となる栄養、血液、酸素を循環させる体液となり、命にとっては最必需の一つです。

（b）水の基本性質は次のとおり。

- ・その面を常に一定にしようとする力を内在します。
- ・高い処から低い処に流れ移動し水面を一つにします。
- ・高温から低温に移動循環し水温を一定にします。

- ・清濁を選別・排除せずあらゆる物体を飲み込み（包み込み）ます。
- ・相手に合わせ重い物は沈め軽い物は浮かせます。

これらの特質は、別の見方をすれば、異質のものを一つにする、両極のバランスを取る力、異質体（みな）を調和させる力を有している事になります。どんな器うつわにも形に応じて隙間なく埋め尽くします、「水は方円の器かんびしに随う」〔韓非子〕です。

b. 火気かきに対する信仰について

次のような火の力（神威力・神通力）に対する期待があります。火＝熱＝日＝陽＝太陽の範疇は同義の世界です。

- ・¹；この世のどんな物体をも焼き尽くし（消滅させて）灰燼あしに帰すことが出来ます。
- ・²；その力に念じて精神的には、あらゆる悪霊・穢れ・不吉な予兆を退散・雲散霧消化出来ます。
（今にも続く、護摩祈祷と同じ信仰）
- ・³；適度な太陽熱は、大地や動植物に温熱を与え、それらの生命力維持に寄与します。
- ・⁴；太陽熱（火）が過ぎれば、大地に過乾燥や早魃さつの悪影響、火災の加害を齎もたらします。
- ・⁵；太陽光（熱）は光合成を以て植物の成長を促す、また、その作用を以て空気中から二酸化炭素を吸収、酸素を排出する。

(2) 神社そのもののご神徳について

a. 「水稲荷神社」について

前記図 1-13 にあるとおり、水を冠しているが、御祭神は「火と水の神」です。敢えて人間に例えるならば、名前とよって立つ思想・哲学のようなものです。お稲荷様に敢えて「水」を冠おろがみして拝み祀った理由は、特に『水』の力に期待した（陰陽五行説の）水気に対する信仰からです（でしょう）。水は、命はもとより作物の五穀豊穰にとっても必要不可欠・絶対必需のものです、時には天皇自らが雨乞神事を執り行った歴史にも鑑みて、水気信仰は重要であったのです。時には洪水を齎すが、それは潤しの反面ですから、水自身が持つ自己制御性です。もう一つは、火災対策の一つです。前出「古峯神社」は火伏・火防の神様ではあるが、現実の火災に対しては「水」の消化力にすぎる他はありません。

b. 「古峯神社」(石碑) について

「火伏の神・火防の神」だから中身は「水の神」と思いたくなるが、そうではありません。ここの「古峯神社」は、火を鎮める、火の勢いを抑制する、反面、火（熱）を乞うという両面を制御する力を内蔵する神様として崇め祀って来たのです。また、人々に火の災いが及ばないようにするという事は、悪い火・祟る火た・忌火いみびを一手に引き受けているという事なのです。よって、表は制火（静圧）で裏は猛火（動圧）、つまりは地球の営みと同じなのです。平時の地表は静地、時には地震、マントルから火山が噴き出す動地に変化します。

熱の招来を期待して信仰の対象とした「火神」は、すなわち、火（＝熱＝日＝陽）に対する信仰は太陽信仰と一体です。太陽神といえば天照大御神あまてらすおおみかみです、そのアマテラスを祀るのが伊勢神宮内宮です。前記のとおりこの域に「大神宮」――伊勢神宮信仰の証――の石碑が4基も（正確に基数を把握はしていないが、この中の割合としては一番多い感じがします。）あります。

あらためて「古峯神社」の持つ信仰対象を簡単に再確認して置きます。呼び方は「こみね、ふるみね、こぶはら、こぼはら」などと地域によって様々のようです。元々は、あるいは共通するといっても意々かもしれないが、信仰対象の神徳は「火伏の神、火防の神」です。天狗信仰などとも習合し、海上安全、五穀豊穰、家内安全・商売繁盛等あらゆる日常茶飯事の開運・除災・心願成就あがの神として崇められて来まし

た。

余談ですが、「火伏の神」自身が住まう社殿（神社）の火災消失はいくらでも事例があります。日本の神は「神（和魂）と鬼（荒魂）」の対極を同時に内包し、偶にしくじったり、失敗したり、人を祟る鬼になったり、恐ろしい悪魔になったり、人間にも似て豹変自在なのです。一神教の訓えるような唯一絶対を正義とし、その独善的な勧善懲悪を徹頭徹尾押し通すような偏屈純粹教ではないのです。

（3）各共通、「物（神社・石碑）は南向き、拜む人は北向き」について

標高 580m 地点の「^①点石碑 7 基と元社殿」も、標高 570m 地点の「^②点古峯神社」石碑も正面は真南を向いています。文字が真南向きということは拜んだ人間は真北向きとなります。一大聖地としての存在意義を成す象徴物が同じ南向きです、これには必ずや意味があると思います。

陰陽五行説ならびに易経の訓える処に由来すると考えています。それは、南北の子午線軸――北の水気、南の火気――を強く意識したからだと思われています。それらを考慮に入れつつ設置方向を決めたのではないかと思います。その根拠について推量して見ます。

元社殿の向きは判明しませんが、図 1-3 の現地において、旧「道智道」から主道を踏んで上がって行くと、平地の直前では真南から真北に向けて突き上げてその広場に到達する状況にあります、よって元社殿は（も）真南向きに建てられていたことは間違いないと思います。また、元社殿（水稻荷神社）の御祭神は、前記のとおり「火と水の神」としているが、水気に加えて「火気」に対する信仰も込められていたものです。

それらからいずれにしても、陰陽五行説の南は「火気」、北は「水気」を強く意識して、設置したものと考えています。

また、古峯神社の南向きは「火伏の神」自身に火のエネルギーを蓄える、より強大にするために、神そのものである刻字が「火気」の方向を向いている、向いて「火気」の充満を浴びる、という事でもありましょう。火は時に火事で暴れる一面を持つが、反面、温熱や煮炊きには必需のものです、これらは火自身が持つ自己制御性です。

ところで、落ちると恐ろしい雷を嫌いますが、それは激しい光（火）を伴うからです。反面、水を呼ぶ神様としても崇められています。対極にある火と水の両方を内蔵することから、怖いものの対極にある善神として、これを「雷神」と称しています、対極にある火と水を同時コントロールすることに期待を込めて信仰の対象としています。

4. 設置位置の意義について

自然の地形を絶妙に利用した先人の知恵に感嘆します。先の図 1-3 をあらためて眺めて、まず、550m 等高線を結んで見直したのが図 1-16 のとおりです。西北方向に何か口を開けている様子です。「^②古峯神社」を「^①水稻荷神社・石碑 7 基」と並べないで、あるいは同敷地内に設置しないで、なぜ、わざわざ、160 m も東方に離して設置したのか、また、図 1-3 の③と④の石碑群との関係は何を意味するのか、という疑問が出てきました。

図 1-16 を **(※)** トポロジー視点からデフォルメ化 (※簡略化) すると図 1-17 のようになります。**(※)** 数学の一分野の位相幾何学、元の形を切ったり貼ったりせず変形すること。

まずは、図表 1-16 と図 1-17 を重ねてイメージ化してみます。なお、「西北」の方角について参考となる数点のコラムを図 1-18 記載します。上記この疑問の解決には様々な角度からの論考が必要と思われる

るが、浅才非学の身ながら勝手に以下の4点(㊦~㊧)を想像して見ました。

㊦；風に対する信仰です。西北の中口大陸から吹いて来る北西の風は、吾が国土にとって特に冬期間は厳しいものがあります。風には雷神が乗って(紛れて)来ます。しかし一方で、風は農作物や大地を乾燥させる自然の力も有します。風には善悪両面を持っています。したがって、退散させる、封じ込めるという手法ではなく、一層の事、呑み込んでしまう考えに立ったのです。利活用の取捨選択と防風対策の知恵は、図1-3の配置において、①③④域の神仏の靈魂の活躍で対応したのです。

㊧；悪霊の消化・浄化に対する信仰です。集落の人々は、外部からの悪霊の侵入防止のために隣接域との境界に供養塔・庚申塔等を配置したが、北方の旧日影地区と南方の旧中平地区の境界に当るこの地の③域と④域の石塔を見ればその事実がそれを裏付けしています、いわゆる結界の設定です。しかし、それとて完璧ではないだろうから防御態勢を潜り抜けた悪霊に対しては、次のようなストーリーを以て神威・仏光のエネルギー(呪術)を以て退治したという事でしょう。

侵入して来た善霊(和魂)や悪霊(荒魂)は、③・④と①稲荷大明神(水稲荷神社の権現)の力で以てここで噛み砕き粉碎し篩ふるいにかけます、善霊は善魂(和魂)としてこの神仏靈はそれを蓄蔵し神威力・仏光力を増します。一方、砕いた悪霊はスルーパスして(水に乗せて)後方に流してやります。そこで後方に鎮座している「古峯神社」の神魂は持てる「火の力」を発揮し、その悪霊を焼き尽くし消滅させてしまいます。なお、土壇は下歯の牙の役割なのかもしれません。

【コラム】「方位」のこと・・・インターネット(ウィキペディア・コトバンク等)から

その1；陰陽道の「天門」とは、北西の方位の事である。天帝(道教の最高)が住まう宮殿の門である。他方、天門は怨霊や魑魅魍魎が入ってくる凶方位ともいう。つまり、この世は善いことだけではない、悪いことだけでもないという捉え方をする。

その2；天皇の四方拝について(世界大百科事典 第2版の解説より)

年の初めに天皇が天地四方に拝して年災を祓い、幸福無事、五穀豊穰を祈る儀式。清涼殿東庭に屏風八帖を立て、中に高机三所を置き、香炉と灯台(燭台のこと)と造花を供え、天皇は、北に向かって、次いで天、西北に向かい、次に四方、山陵を拝する。

(細かい儀式を知る由もないが、今も毎元旦に「四方拝」を執り行っている。)

その3；北東の鬼門以前はこの北西が恐れられていたという。北西風を「アナジとかタマカゼ」と称し、悪霊とともに善神も来る両義的な方位とし、屋敷では稲荷を祀って来たとの事です。なお、「タマカゼ」のタマは「霊」で、特に東北・北陸地方の日本海沿岸では、冬に北西から吹く暴風をいう。

図表-18

その流れは「大祓詞」おほはらえのことばから想像したものであります。人が罪穢れの祓を神に祈ると、瀬織津比賣せおりつひめ⇒速開都比賣⇒気吹戸主⇒速佐須良比賣と、持ち場立場の神様がその役割を果たして、リレー・バトンタッチして行く中で祈り手(人間)の罪穢れは雲散霧消・消滅してしまうというのであります。

いわば「古峯神社」に対して、図1-3の①・③・④に祀った神仏靈魂の守護神としての役割を与えた、したがって、全①・③・④の靈魂を包括し見守る形を取るために、敢えて後方に位置取る場所に配置させたのではないかと想像しています。

換言すれば、前衛に立地の「水稲荷神社」の火気力に対しては、破碎力を期待し、後衛に立地の「古峯神社」の火気力に対しては、壊滅(完全消滅)力を期待したのです。いわば、前者には火気コントロールを副業として、後者には火気コントロールを本業しての使命を与えたということでしょう。

㊦・㊩に関し、陰陽道では、西北は天門からの魑魅魍魎の侵入対策として、方位除けの神や神社仏閣を置いて守って貰うのです。つまり、門番を置いたという信仰があります。この信仰にとっても類似しています。

㊧；子孫繁栄に対する祈りです。図1-17についてデフォルメ化をさらに強めて人体化したのが図1-19であります。凹部（女）は凸部を欲しがります、凸部は北西の風や荒魂の化身（男）です、その交渉は凸凹の合体（③と④は睾丸）の形に進展します。精子と卵子の結合は命を作り、水（体液）に保護されて母体の腹に宿り成長します。いずれにしても命の育みには火（エネルギー）とそれを調節する水が必要です、実に理に適っている構図になっています。

㊨；金気に対する祈りもあります。西北方向に口を開けています、五行説では「西」方位には「金気」と、季節は実りの「秋」を配当しています。西方浄土にも繋がります。

地形を上手に利用して、五穀豊穰の実りや人間の真っ当な営みへのご褒美としての金銀財宝の入手を託した祈りの場でもあったのでしょうか。

だったら、①石碑群を拜む時は真西を向くように配置しなかったのかという疑問が湧きます。そこは敢えて明瞭にはしなかった、と思うのです。つまり、古来より日本民族はその性格として、神仏かみほとけに対して明あからさま白に、露骨に金銀財宝・金銭を要求するような祈願はしなかったのです。日常の暮らし方の因果応報として、結果して祈りが金銭に結び付けば良いのです。

5. まとめ

(1) 図1-13 説明版の「・・・この内の四つの動きを包容する水は・・・」のところについてですが、この『四つ』とは、水が相手とする『木・火・土・金』です。【補完資料-2】を参照のこと。

㊰水と木との関係を見ると、表は公説「水生木」の相生関係となる。【補完資料-2】の⑤

㊱水と火との関係を見ると、表は公説「水剋火」の相剋関係となる。【補完資料-2】の③

㊲水と土との関係を見ると、表は公説「土剋水」（【補完資料-2】の④）の相剋関係であるが、私説、その裏力（陽中陰あり、陰中陽あり）が増せば、「水生土（水は岩石を砕いて土を作る）」の相生関係に転換して行く。

㊳水と金との関係を見ると、表は公説「金生水」（【補完資料-2】の⑤）の相生関係であるが、私説、その裏力（陽中陰あり、陰中陽あり）が増せば、「水剋金（水に長く浸たされた金属は錆びる＝水は金属を錆びさせる⇒水は金を溶かす）」の相剋関係に転換して行く。

水に焦点を当て、あるいは水を中心に、この四つの相対（待）性原理を見ると、「相手を生む（援ける＝相生・肯定指向）」にしても、「相手を剋する（傷め付ける＝相克・否定指向）」にしても、いずれの場合も、水が主役となって相手と関係性を持つと理解出来ます。言い換えれば、大きく鳥瞰的視点からは相手を包摂していることとなります。

(2) 社殿の水稻荷神社（水神）と古峯神社（火神）と此花佐久夜比売命（火と水の神）がきっかけとなり、独我の勢いでいろいろと想像が掻き立てられます。

水と火の神を祀って来たその心を総括的に見ると、水と火との関係において、攻守処を変える表裏の関係性を見出して、不離一如のその靈力に感謝を表して来たのです。まさに、陰陽五行説のいう「陽中陰あり・陰中陽あり」で、強弱、優劣がぐるぐる入れ替わるからこそ、森羅万象に、生命誕生や淘汰が、栄枯

盛衰や均衡が生まれるのだという訓えの実践ではなかったかと思っています。

作物も動植物も人間も、日照と降雨に対してはほど良い働きを期待します、そのための火と水の調和を願って止まなかったのです。人々は、それら「火や水」の持つ力を最大限に引き出すためには、中国から伝わって来たとは言え、当時は政治的思惑とは関係なし、その訓えに大和民独の解釈を入れて利用したということでしょう。水は火を消す（剋する）ことが出来ます、しかし、立場を変えて、火は水を蒸発させる（剋する）ことが出来ます。どちらも強く、どちらも弱いのです、矛盾ではありません。

火と水に係る神様を、時には対比的に見て、時には同居的に見て、同等化・併存視し、きちんと崇敬していたということでしょう。自然と一体となって生きていた人々は、「今日の不運（例えば、今年の不作）は明日（来年）の幸運（豊作）」を期待し、「今日の幸運（豊作）は明日（将来）の不運（不作）」の戒めとし、地球のサイクルと共に柔軟に対応して来た証でもあるような気がします。

豊作あるいは凶作は個人の所得のみならず^{くに}邦全体の繁栄・士気に係る事象であり、今様の好景気あるいは不景気と同様に社会にとっては大問題であったでしょう。日照（太陽熱＝火気）と降雨（水気）に対してはとても敏感だったでしょう。

こんなことを思う時に浮かぶのが、アクセルとブレーキの話です。時には水は火をやっつけ、時には逆に火は水をやっつけ、犬猿の仲の水と火は、時にはちょうど塩梅よく調和を取ります。押したり、引いたり、陽中陰有り・陰中陽有りです、そのような性質を見極めて人間のあれやこれやの思いを仮託したのです。いわばアクセルとブレーキ、^く左右を以て上手に操ったということです。今の人間も変わりはないでしょうが、昔は自然の息吹とより強い一体感・共生感を抱いていたはずですから、私の想像以上に宇宙規模での真剣な祈りがあったのかもしれない。

当時の人々、五穀豊穰、子孫繁栄、村落の安泰を祈り、そのために^{かみほとけ}神仏と一体になる儀式を齋行し、自然との一体・共生の理念のもとに巧妙に仕組んだ一大聖地を大切に守って来たのでしょう。火の神と水の神の神徳をよく理解し、その能力が十二分に発揮されるように綿密な計算の上で配置した、役割分担を与えたのでしょう。適材適所をよく見極めて構想したということです。そのように確信を得ることが出来ました。

人々はまさしく^{か=(ひ)}火と^{み(ず)}水に一つの力（か・み＝神）を託して祈りの対象にしたということでしょう。往古からの^{さいし}天皇の祭祀の縮図ということです。

「もの・こと」には一長一短、強弱などの両面を持ちます。この世の森羅万象は相対立する要素が同居し不離不可分を成して、正常に振る舞うのです。人間とても同じです、矛盾・撞着を一つにして生きる動物です。娑婆の欲得深い人間が、同じ現象に接して、こちらが正しい、いやあちらが正しいとして喧嘩しても永遠に決着が着くはずはなく、まったく、まったく無意味だということを気付かされます。

そのようなことを全部、全部織り込んで人々は祈って来たのです。

(3) ところで、

¹¹ 自然の地形地勢を上手に利用する聖域の構築に当っては設計したはずですが、設計者がいたはずですが、誰だったのでしょうか。

¹² 旧日影・旧中平集落の廃村・離村経緯の詳細は不明であるが、火災が主因とも云われており、丁寧に祀ったのに神頼みが効かなかったのだ、それはすなわち迷信云々ということでしょうか。そうではなく、上記のとおり陰陽の世界故に隆盛もあれば、衰退もありで、時の運が巡り合せたというだけでしょう。

¹³ ^{かみほとけ}神仏に至れり尽くせりの儀式を以て祈りを捧げたのにも関わらず時々災厄が降って来ます。^{ぬか}額づく

人間の方に真心が入っていないのでしょうか、それとも、神仏が欲深いのでしょうか。

.....

いろいろと誇大妄想的に脱線もありましたが、このような想像力に着火させて貰った史跡とそれらの情報源となって頂いた関係者に感謝申し上げます。

【 補完資料－２ 】 陰陽五行説と易経のこと

振り返れば、旧『道智道』の道筋沿いに前記のとおり的一大聖地があり、中でも、【補完資料－１】内図1-13 のとおりの現社殿の前にある説明版の中に記載されている五行について発展的に捉えて見ました。

【補完資料－１】の中で触れた陰陽五行説や易経の知識について少し齧ったので、その初歩・基本について記述します。なお、同説については、専門書が山のようにあり私の及ぶ処ではありません、ついでに、基本を踏まえつつも、かなり私説（私見）を加え独自色で染め上げています。

1. 『陰陽（魚眼）太極図』

この世の万物生成の初期過程を簡単に概念化（図化）したのが図 2-1 のとおりの『陰陽（魚眼）太極図』です。何もかもが“一つ（全一的）”になっている「無・空」は混沌・混然一体（一＝ひとつ）から、初めに、『陰と陽』が生まれたとする考え方です。これが人間の知識となる「分ける、分けた」――分別知の始まりであります。世の中の諸々の現象、森羅万象の活動は変転極まりなく、人間の心（思念も感情）も絶えず変化し、一定していません。そのことは真逆の性質を有する『陰』と『陽』の二元がせめぎ合い（吸引反発、収縮膨張）をしているという観方です。その陰陽はあくまでも単一世界における両極であり、不離一体の相待・共存関係にあるとします。これは太古からの宇宙に貫徹する原理原則、自然の理法というものです。私は簡潔に言う場合は、「相対・相待性陰陽原理」と称します。相対は対立・反発、相待は相待つ・吸引の意々です。この図の動きについて簡単に説明して見ます。黒色は陰を、白色は陽を表す。陰の頭部中央にある魚眼のような白色の点は陰中の陽種子を示し、陽の頭部中央にある魚眼のような黒色の点は陽中の陰種子を示している。黒色の陰は右側で下降する気を意味し、白色の陽は左側で上昇する気を意味する。魚尾から魚頭に向かって領域が広がって行くのは、それぞれの気が生まれ、徐々に盛んになって行く様子を表し、やがて陰は陽を飲み込もうとし、陽は陰を飲み込もうとする。陰が強まって極まれば、反発した陽（の種子）が勢力を増し陰は衰退に転じ、逆に陽が強まって窮まれば、反発した陰（の種子）が勢力を増し陽は衰退に転じることを表す。

（１）「一極（全一）二元の三律構図ワンセット」

陰陽説は、「一極（全一）二元論」とも言われ、言い換えれば「陰陽同根（同根＝一つ）」であります。一方では「相反・対立」、他方では「糾合・逢引き」の両極の性質が「一つ」に内蔵しています。全一は、「分別知」に対する『無分別智』の世界です。正と反が同根・同時進行なのです。よって「一つ」そのものには、もちろん陰陽、色付けはありません。宇宙の森羅万象のもの・ことの動静に作用と反作用が同時に生じています。世の中万事、77億人が寄りたかって最高の知恵を結集して出し切った結論（判断）と雖も「唯一絶対」というもの・ことはありません、なぜならば、「陰陽同根に付き対極の種子有り、陽中陰有り・陰中陽有り、万物流転」だからです。まさに、正真正銘の「単一体両性具有」の理法の世界です。私は、陰中の陽と陽中の陰の魚眼は、実は離れた処にありながら、不離一体化に誘導するトリガーポイント（自律的自操性変転萌芽の芯）の役割を果たしていると思立っています。

陰陽要素の一部事例を属性毎に図表 2-2 のとおり整理して見ました。この関係を一般化、抽象化したのが図 2-3 であります。以上について、私は、この世のもの・ことは「一極（全一）二元の三律構図を以てワンセット」とも称しています、中身の意義は図 2-1 と同じ意味合いです。

(2) 展開

人間そのものにも当てはまります。人間の認識は、このような対抗する二元・二項のせめぎ合いの中で右往左往し、喜怒哀楽の感情となって悩むのであります。喜怒哀楽は、喜と怒、哀と楽はそれ自体が相対です、ところが、そんなことを棚に上げ、それぞれが自身にとって都合の良い一方的な観方を絶対化・正当化しようとし、だから感情が蒙昧します、争奪・対立が生じます。人間の諸々の心のうごめきは、刹那の感情故に、その一時の感情を以ていくら論じても一方の見方に落ち着かないのです。対立の一件落着は、^{いつとき}一見落着に見えたようで、実は妥協と譲歩の産物に一時安住したに過ぎません。お互いに心の奥深くには“いつか仕返ししてやる！”が残ります。万物、陰陽同根の生命体なのです。また、無機質のもの・ことも陰陽同根の世界です。陰陽の吸引反発、収縮膨張の作用は、陰陽の両面を欲しがりバランスを図ろうとする一面があります。その動き・働きは、自称「帰一還元」(全一に帰り、元に還る)の理法であります。人間界で謂えば、理想の境地を希求する精神作用です。人間が穏やかさや安寧を自覚出来るのは、対立がない境地、つまり、理想の境地、^{ぜんいつ}全一の境地にある時です。

| 一極 (対象) | 二元要素 | |
|------------|-------|-------|
| | 全一 | 陰 |
| 状態 | 凹 | 凸 |
| 性 | 女性 | 男性 |
| 宇宙 | 地 | 天 |
| 幾何 (前) | 円・まる | 方・四角 |
| 幾何 (後) | 方・四角 | 円・まる |
| 天体 | 太陰(月) | 太陽(日) |
| 面 | 裏 | 表 |
| | 悪 | 善 |
| 倫理 道德 | 邪 | 正 |
| 曼荼羅 | 胎藏界 | 金剛界 |
| 自転 | 夜 | 昼 |
| 数 | 偶数 | 奇数 |
| 図表 2-2 | | |

(3) 「陰陽五行説」への発展

別々に発生した「陰陽説」と「五行説」が融合し、万物万象を解く理論に発展しました。

「五」の起源については二つの見方が融合しています。

その1；東西南北の四方に中央を加えたものという考え方(東-木、南-火、中央-土、西-金、北-水)です。

その2；肉眼で観察が可能な五つの惑星、(水星・金星・火星・木星・土星)に淵源があるとする考え方です。

地球周辺の宇宙の天空は、太陽(日)と月の二つの天体が主役を成します。日は昼に光ります、月は夜に光ります。二つは対比(対照・対称・対象)的ですが、それはすなわち日は陰陽の陽の象です。月は陰陽の陰の象です。陰陽と五行の結合は「日、月、木、火、土、金、水」と成って、曜日(7日間)の概念の基になりました。(図2-4) 月は日の光を受けて光ります、ここでは前者が従で後者が主です、日は遍く光を発散しますが、月なくして月は光を受け止められません、よって、月が光るということは今度は月が主で日を従とする見方が出来ます。日月の月日は陰陽と表裏です。

2. 五行の相生と相克

五行の各要素間には、相生と相克の関係が生じます、その構図を図2-5に記述します。

3. もう一つの「火と水」の関係（以下、しばらくこの順次で記述）

ある処に日本の「神」は「火と水ず」からとったものである、と書かれていたが、なるほどと思います。単なるこじつけとは異なる意味深さを感じます。さて、以下、私見で想像・創作して見ます。

直感、原初的には、図2-6にあるように火は男（凸部・陽・上昇垂直指向）に、水は女（凹部・陰・下降水平指向）に擬人化出来ます。地下から吹き上げたマグマは凸部の中央部を目指し、天に向かって伸びる性質を有します。他方、天から恵まれた雨（水）は、低いところ（凹部）を目指し、横に広がる性質を有します。

この凸の図柄を凹に横から移動・接着して合体させる、あるいは、凹に凸を下から合体させると、図2-7のようになります。

これを「山谷矩形図」と名付けます。凸を凹に直上からの合体では、余りにも露骨で人間臭いので、神（火と水）の世界では恥ずかしく隠しております。

これに類似の物に図2-8の中国では、火鍋子と言う「しゃぶしゃぶ」の鍋があります。見事です。中央の凸部内部には下からガスの炎（火）が立ち上ります。この構造（かたち）は火と水の真逆（相互相剋）関係――凸を裏から見れば凹であり、逆に、凹を裏から見れば凸である――にある性質を両性具有していることとなります。

さらにことを進めて、図2-6に「火と水」の文字を重ねて見たのが図2-9です。今度は、その図2-9に於いて、中央当りに横線を引いて、それより下を下半身、上を上半身に見立てたのが図2-10です。下半身の中央縦ラインに視線を向けると、左の「火」は開いているから、凹様相女陰部の連想に進展し、右の「水」は、垂直棒が立っており、凸様相男根部の連想に進展します。

よく見ると、前段と後段では、火と水の性質が入れ替わった、反転したのです。何かの刺激圧力（ここでは凹凸スライド合体）を与えると変質するという事です。ということは、もともと裏側にその性質を有していた、それが表出したということです。整理すると図表2-11のとおりです。古代中国神話における、伏羲（男神）と女媧（女神）の交渉前後の反転と同様の事象です。人生山あり谷あり、喜怒哀楽の感情も凹凸、それはすなわち熱い火と冷たい水の絡み合い、吉凶は糾える縄の如しのとおりです。

| | 前段（図2-6） | 後段（図2-9） |
|---------|----------|----------|
| | 通常 | 刺激後 |
| 火 | 男 | 女 |
| 水 | 女 | 男 |
| 図表 2-11 | | |

「火と水」に「凸と凹」と「男と女」を持ち出す、異質のものと同形のを組み合わせる、合体させると、本来の性質とは異なったものが生み出される、大げさに言えば新たな生命誕生原理と解釈出来ます。矛盾ではないのです。「同質異形（例えば、人間としては男と女は同じであるが、姿形は異なる）」と「同形異質（例えば、図2-6と図2-9では同じ山谷矩形図姿に性体が異なる男と女が内包）」のものが転換・重畳し合う、とも解釈出来ます。もはや陰陽が混然一体となっています。前記、陰陽の基本説による「帰一還元」理法の自然作用からすれば当然のことです。

つまり、物事は本質において絶対的優劣を比較出来ないのです。優・劣に見えるのは相対関係で、かつ、一時の表層であって、さらに刻々と変化して行きます。陰と陽は、単体相互では一見衝突・対立関係を見せませんが、「陽中陰あり、陰中陽あり」で、ある状態の固定が永久に保障されないのです。

これらの陰陽の教えを思う時、ふと浮かぶことがあります。地球より重い人間という、霊長類最強の人間は、元々、相互に比較対象範囲外の存在・尊厳です。人間関係はあくまでも一局面での相対関係に過ぎません。ところが、裏で平然と他人の悪口を並べ立てる御仁がいます、自分は偉くもないくせに偉いと絶

対視（実は虚妄）し、錯覚・倒錯しているのです。そういう人、あるいは「世は盛者必衰、俺もいずれは死ぬ、だから嫌われてもいい」と開き直り、威張っている人の話には私は馬耳東風の姿勢、巧妙な面従腹背で対応しています。（余計なことでしたが。）

要するに、諸事万般、相対関係にあるものを「俺は“絶対”だと思ふ処」は幻想に過ぎないのです、それに気付いて自嘲し謙虚に生きないと、様々な悪霊が絡み付きます。

4. 水には面白い性格（物理現象）があります。

図2—12（右は ChatGPT 作図）を参照のこと。水面を伝わる波は、岩のような障害物に当たると、単に直進してすり抜けるのではない。波は $\nabla^2\psi - \frac{1}{v^2}\frac{\partial^2\psi}{\partial t^2} = 0$ に従いながら進むが、岩の内部には入ることができないため、岩の縁に沿って動きを変える。このとき、岩の縁にあるすべての点が、それぞれ新たな波の出発点となり（ホイヘンスの原理）、そこから小さな波が四方に広がっていく。その結果、波は岩の裏側にまで自然に回り込み、全周囲に行き渡ることになる。また、それぞれの点から生じる波は、その場所の面に対して最もまっすぐな方向、すなわち接線に垂直な方向へ強く進む（寄与は $\cos\theta$ に比例する）。すなわち、水は岩の全周囲において、あらゆる点に正対するかのよう作用するのである。

この現象から、私たちは二つのことを学ぶことができる。

第一に、垂直に当たるとは、正々堂々と真正面に立つということであり、相手の思想信条の如何を問わず、真摯に真っ向から対峙する姿勢である。そこには、後ろから鉄砲を撃つような振る舞いはなく、すなわち、本人のいないところで誹謗中傷や陰口を重ねるような態度とは無縁である。

第二に、裏側まで回り込むとは、先入観によって他人の一面のみを見て全体を判断することの危うさを戒めるものである。人は往々にして表に現れた姿だけで評価しがちであるが、「能ある鷹は爪を隠す」の言葉のとおり、能力をあえて表に出さない人も少なくない。その見えない側面にまで目を向け、全体を捉えようと努める姿勢こそが、人付き合いにおいて極めて重要なのである。

5. 易経^{えつきやう}も視野に

陰陽五行説は、易経とも習合しています、その訓えを寄せ集めて私的に簡略化した歴を図2—13のように記述しました。易経も「陰陽」を原初の起源とするものです。

| | | | | | | |
|-----|---|---|----|---|---|----|
| 天=陽 | 1 | 3 | 5 | 7 | 9 | 奇数 |
| 地=陰 | 6 | 8 | 10 | 2 | 4 | 偶数 |
| 五行 | 水 | 木 | 土 | 火 | 金 | |

【 補完資料 - 3 】 月山～旧道智道の古今風景（替え歌）のこと

最後に、歩きながら浮かんで来たつたない詩を、私の大好きな讚美歌『山路越えて』の曲に乗せた替え歌を作ったが、図 3-1 のとおりです。

【 補完資料－４ 】 山形新聞に掲載された旧「道智道」関係者踏破の記事

思わず「これだ、すごい、・・・私も歩きたい・・・」とうなりました。

この記事から、私の行動を発展的に推進する内発的衝撃を受けました。全容を早く解明されることを期待しております。

発電所への迂回路が整備されており、旧吊橋崩落地点の渡渉回避が可能となりました。

(end)